地域に寄与する『道の駅』の姿とは　22211232　田所優衣

## 1. 春学期の研究を振り返って

春学期は『道の駅』の基本を学び可能性と課題について研究を行った。現在 1204 駅存在する『道の駅』は国の補助金が出ることもあり新設を目指す団体も多く増加の一途をたどり飽和している。ただ『道の駅』の必要要素のひとつである地域振興要素が弱いことから地域住民が頼りたいと思える場所になりきれていないと感じた。

秋学期は現地調査を通して居住福祉や QOL を高める機能を備えた新たな『道の駅』の姿を探ることを目標に据えた。

## 2. 地域に寄与する『道の駅』の姿とは

現地調査に行く前に、地域に寄与する『道の駅』の姿とはなにかということを始めに考えた。これは『道の駅』が黒字化している、ことが最も重要だと結論付けた。

黒字化していると観光客、地域住民の増加で地域経済が活性化している、地域の雇用が増加し社会増が見込める、収益をまちづくりや課題解決に投じることができる、使用されない指定管理料が他の公共事業に利用できる、などのメリットがある。

そのため『道の駅』が黒字化する条件、黒字化した『道の駅』はどうしたら増えるのかを主眼に据えて取材をおこなった。

## 3. 現地取材と取材を行って分かったこと

今回は関東の黒字化している『道の駅』千葉県鋸南町の保田小学校、柏市の道の駅しょうなん、栃木県宇都宮市の道の駅うつのみやろまんちっく村の 3 駅に取材を行った。共通点と相違点を把握するため同じ質問を行うことを意識した。

3 駅とも黒字化への努力がすさまじく共通点も多かったが相違点も見つかった。経営形態においても企業に委託しているほうが黒字化しやすいのではないかと仮説を立てていたが、市と市に根付く会社が半々程度で出資し専用の会社を興した『道の駅』でも黒字化を達成していた。またアクセスや所在地の人口、施設の綺麗さは様々で新しく綺麗だと来場者や売り上げが増加するかというと必ずしもそうではないことがわかった。

## 4. 私の考える『道の駅』これからの姿

時代の変化に応じて『道の駅』の在り方も変化する必要があると現地取材を通して考えた。黒字化しているというのは大前提のもと取材を踏まえて考えた新しい『道の駅』の姿を提案したい。

一言で表すと「少子高齢化、人口減少社会に対応する住民の共有地」である。現在は休憩所、情報提供機能、直売所を備えていることがスタンダードだが、インフラを支えるスーパーや病院、託児所などの子育て支援機能を備えることが必要だと考える。また既に備える場所もあるが発電や備蓄倉庫などの防災機能も高めるべきだ。官民連携しやすい『道の駅』は今後の社会に寄り添う拠点機能になる可能性を秘める。

## 5. まとめ

『道の駅』は利益を生むことと地域住民の支えになることが両立できるため観光客も地域住民も利用したいと思うサービスを発展させていくことが重要になる。

新しい『道の駅』は以前に増して住民に寄り添う拠点機能となり、今後は都市部に増設することも有用であると感じた